

全ての4号機が撤去されたのは2007年9月30日である。遊技機規則の改正（2004年7月）から約3年、検定・認定の期間が尽きた最後の2機種がホールから消えた日だった。

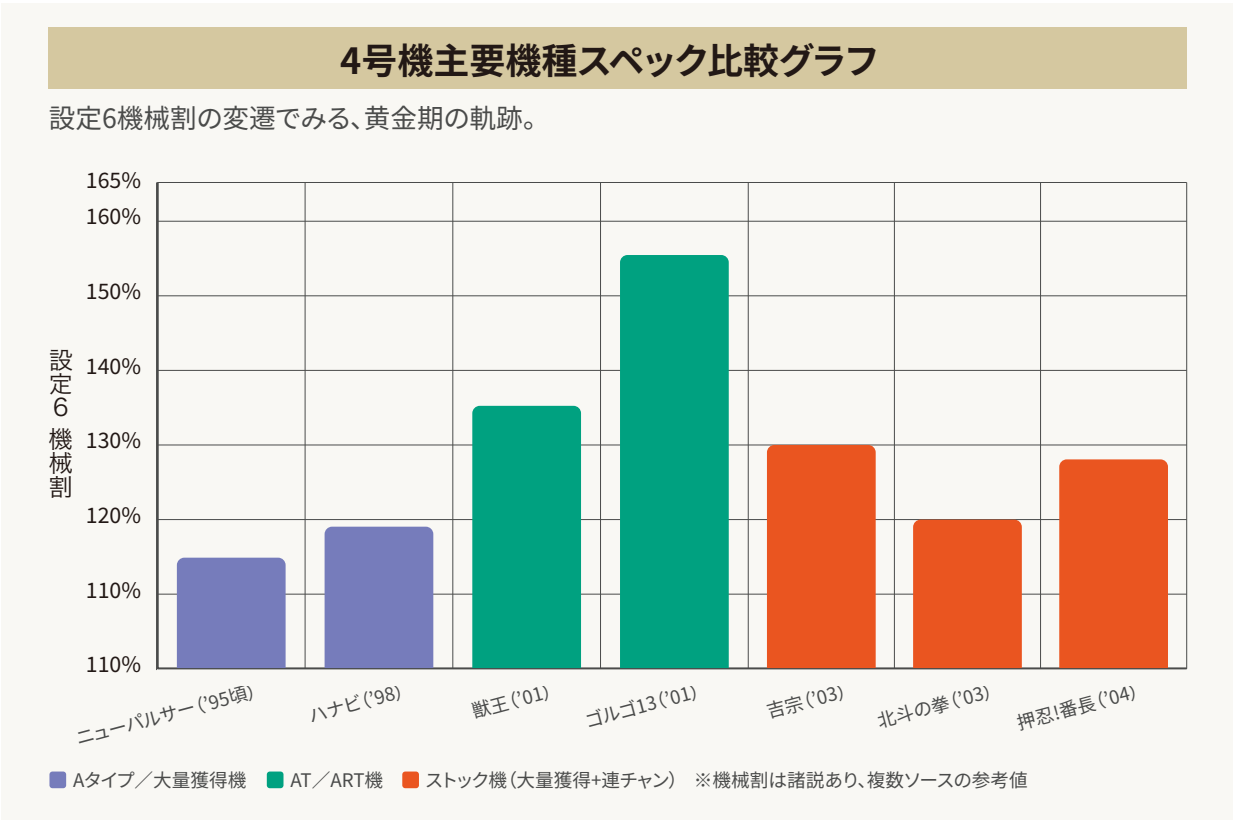
2007年10月から、すべての遊技場に設置できる機種は5号機のみとなった。4号機人気によってパチスロ専門店として改装・開店した店が、再びパチンコとの併設店に戻ったり、廃業したりする例も見られた。

数字が業界の衝撃を物語っている。2007年度のパチンコ店倒産件数は前年比37.1%増の大幅増加となり、同年度パチス

ロ機市場規模（メーカー売上高ベース）が前年比51.6%減の2,423億円にまで落ち込んだ。

当日の現場はどうだったか。「4号機最後の日」という煽り営業もなく、フェードアウトしていったように思えます——と、当時を知る業界関係者は記している。北斗の拳や吉宗Sの最終日には盛り上がりもあったが、ラスト2機種では食傷気味なほど撤去が続いた後で、拍子抜けするほど静かだった。

黄金期の終わりは、爆発的ではなく、少しずつ音を立てながら来た。



14年以上続いた4号機時代が業界に残したものは、出玉の記憶だけではない。バトルボーナスのシステム、連チャン演出、キャラクターとのタイアップ——現在のパチスロの文脈の多くが、この時代に原型を持つ。吉宗のサウンドトラックがカラオケに収録され、北斗の拳が専用ホールを生んだ。パチスロが「遊技機」の枠を超えて、ひとつの文化として成立した瞬間

が、この時代には確かにあった。

だが「1日に100万円以上出るマシン」が現実になった瞬間、それは規制の正当性を行政に与えた。各メーカーによる「やり過ぎ」が、14年以上続いた4号機を終焉させることになった。そして5号機という、まったく別のゲームが始まる——その話は、次回以降に続く。

※本稿に記載の数値等は複数ソースで確認したのですが、集計時期や調査方法により差異が生じる場合があります。参考値としてご覧ください。

[次回予告] 第5回 群雄割拠【メーカー史①】～メーカーたちが火花を散らした、あの頃の勢力図～
この黄金時代を作り上げたメーカーたちに焦点を当てる。ユニバーサル、サミー、大都技研、山佐——彼らはどこから来て、どう台頭したのか。



～前回の振り返り～

前回は1992年のCR機登場から始まった射幸性競争と、それに乗じて台頭したパチスロ4号機の爆発を辿った。大量獲得機、AT機——加速し続けた出玉インフレの果てに、終幕は静かに近づいていた。「1日100万円が出る台が、夢の終わりを連れてきた」

第4回：黄金期の終焉

～4号機撤去、あの興奮はこうして消えた～

北斗の拳、吉宗、番長——名前を聞くだけで指に力が入る人がいるはずだ。1日で万枚が現実になったあの時代は、「やりすぎた」という言葉とともに、静かに幕を閉じることになる。

2003年。パチスロ史上最大の名機が生まれた年として、今も語り継がれる。

2003年10月、サミーから発売されたパチスロ『北斗の拳』。累計約62万台の販売を記録し（サミー公式発表）、パチスロ史上最大のモンスターマシンとなった。当時は専用ホールが開店するほどの異常なブームだった。

同じ2003年には、もうひとつの伝説が生まれている。大都技研が2003年6月に発売した『吉宗』。ピーク時の設置台数は約26万台（2005年11月）に達し、大量獲得機の中では歴代最大の設置台数を記録した。

711枚が獲得できるBIGボーナス中に次のボーナス放出を

内部抽選し、当選すれば終了後1ゲーム目に再びBIGが確定する——「1G連」という仕様が本機最大の特徴だった。ツポにはまったときの出玉性能は4号機の中でもトップクラスで、その半面、最大天井が1921Gと非常に深いハイリスク・ハイリターンな設計だった。

北斗、吉宗、押忍!番長……この時代のホールはまさに熱狂の坩堝だった。吉宗のサウンドトラックCDは累計30万枚を売り上げ、パチスロ機のサウンドとしては異例のヒットとなった。ビッグボーナス中のオリジナルソングが通信カラオケに収録されたことも、当時としては前例のない出来事だった。4号機時代のパチスロは、もはや単なる遊技機の枠を超えていた。

頂点は同時に、転落の始まりでもある。

第3回で触れた通り、2002～2003年に日電協の自主規制が動き、一部機種の検定取り消しへと至った。だがそれで止まらなかった。

2002年7月の自主規制改定で「適度な射幸性を超えるおそれがある」とされた機種が4.1号機と呼称されるようになり、さらに2003年には「著しく射幸性が高い」と判断された機種が検定を取り消され、撤去された。

しかしそれでも出玉競争は止まらなかった。日電協は2002年7月の自主規制改定以降に審査を通過した機種を4.5号機と呼称することとした。AT機は事実上審査がほぼ通らなくな

り、ストック機がメインとなった。

さらに2004年1月には規制が強化され、以降に審査を通過した機種を4.7号機と呼称することとした。総じて4.5号機より出玉性能が抑えられたが、短期的な爆発力は登場当初の5号機と比べれば依然勝っていたため、客のニーズは高く多くの機種が検定期間満了まで設置され続けた。

業界は規制を受けながらも、名機の後継機を送り出し続けた。『北斗の拳』の検定切れに伴い後継機として『北斗の拳SE』が登場。4号機の終焉まで1年ほどの繋ぎ期間でも、これだけ売れてしまうのが4号機時代の熱気だった。

そして決定的な日がやってきた。